第七回福崎町柳田國男ふるさと賞　小学生高学年の部　受賞

わたしの名前と福崎町について

八千種小学校五年　内藤　のこ

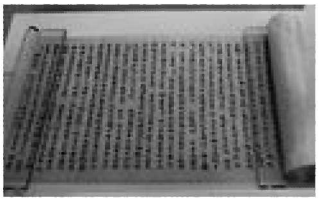
◆調べようと思ったきっかけ

わたしの名前は「のこ」といいます。わたしはこれまで、お父さんが大工だからこんな名前だと思っていましたがそうではありませんでした。お父さんに聞くと、「この八千種を作った人の名前からもらって付けたんやで。古い書物にもでてくるで。」と教えてくれました。わたしは自分の名前の由来の人が何をした人なのか。そして福崎町がどうやって出来たのか。すごく気になったので調べる事にしました。

◆播磨国風土記

この書物は日本最古の書物「古事記」が完成した次の年、713年に元明天皇の命令で作られました。今からなんと1300年ほど前の物です。古事記、日本書紀、風土記など日本の歴史が初めて記録された時代でした。

風土記は当時60余りあった「国」ごとにあったのですが、今残っているのは「播磨」「常陸」「出雲」「肥前」「豊後」の5つの風土記だけしか残っていません。中でも「播磨風土記」は最も古く、大変貴重なものだといわれています。この本には地名の由来、土地の産物、古くからの言い伝えなどたくさん書いてありました。



・八千軍野の由来

この地名は大昔に伊和（イワ）大神（オオカミ）と天日（アメノヒ）槍（ボ）命（コ）（神様と神様）が争っている時に天日槍命がここに八千人の兵を置いたので八千軍（ヤチグサ）野というようになりました。今の八千種です。八千人の兵でどんな争いがあったのでしょうか。

・戦いの初まり

この辺りは伊和大神が国を作っていました。そこに新羅の国の王子、天日槍命が揖保川の河口にやってきました。天日槍命は「わたしの住む所を与えて下さい」と言いましたが、伊和の大神は陸に上がることを許しませんでした。

天日槍命は剣で海をかき回し、大きなうずを起こしてその上にどっかりと腰をおろしました。その力強い姿を見て伊和大神は「ぐずぐずしておれぬ。戦いの準備じゃ」と戦いが始まりました。

宍粟市にある播磨国一宮伊和神社（伊和大神）
ＶＳ
豊岡市にある但馬国一宮出石神社（天日槍命）

・戦い

天日槍命の勢いにおされた伊和大神は腹ごしらえに食事をします。しかし、戦いであわてていたのでポロポロとご飯粒が落ちました。ここを粒岡と書いて、いひぼおかと言い、揖保川の名前の元になりました。二つの神様達は揖保川を上りながらたくさん戦いを続けます。

神崎郡でも糠岡という所があります。これも伊和大神が多勢の兵の米をついて糠が丘のようになったことが名前の由来です。（姫路市八幡）

この戦いで天日槍命は八千種に八千人の軍を置きました。とても大きな戦いだったのでしょう。

・終結

この戦いでは、つる草を三本ずつ足につけて落ちた所を取り合いました。天日槍命は全部出石に落ちてしまいましたが洪水で困っていた人々のため働いたので今では出石神社にまつられています。伊和大神のつるは、養父郡の辺りに落ちました（養父神社）。伊和大神は伊和神社にまつられています。

神崎郡

伊和大神の子を建石敷（タケイワシキノ）命（ミコト）といいます。建石敷命は山崎の神崎山にいました。神の前に広がった所という意味で神前郡と呼ばれ、神崎郡の名前の由来になっています。山の下には二宮神

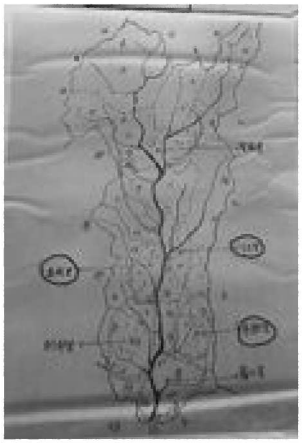
社があり、建石敷命がまつられています。

山崎の二宮神社

山頂にはおおきな岩があり、建石敷命は神崎郡開拓のシンボルです。

福崎町

神様達の戦いが終わり、今の福崎町には高岡里、川辺里、多駝里の3つの里がありました。



○高岡里は神前山、奈具佐山など高い岡があります。故に高岡と名付けられました。奈具佐山には檜が生えています。（福崎地区）

○岡部川のほとりです。応神天皇がここで狩りをされました。猪や鹿がいっぱいいて、犬を使って出していました。勢賀→瀬加（瀬加～田原地区）

○応神天皇がこの辺りを見回りされた時、お伴の阿我乃古（あがのこ）という人が「この土地が欲しいです」と申しました。それを聞いた天皇が「タダニ（素直に）ねだったのだとおっしゃった。それで多駝と名づけられました。（大貫、八千種、船津、山田地区）

・七種と八千種の伝説

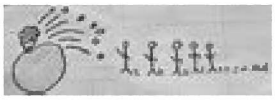
八千軍野の人達はある年、水害に続く干ばつで次の年に持ち越す種もなく、多くの餓死者も出てすっかり弱っていました。その時、一人の農民が奈具佐方面に山芋ほりに行きどんどん山道を入っていくと、日照り続きの日だったのに水音がしました。さらに深く山へ登ると滝の水の流れる音でした。（七種の滝？）

滝の源にたどりつくと「お前はどこから来たか？」と一人の人間の声がしました。びっくりした農民はにげようとしましたが、白いかみの老人が現れ、「にげなくてもよい」と言いました。農民は、村では水害や干ばつで米も大豆も小豆も作物はみんなとれず困っていると説明しました。白いかみの老人は「かわいそうに」と言いながら大きな木の根元をほり、一袋の包を出し、「この中に七種類の種が入っている。これを持ち帰れ」と農民に与えました。

農民はよろこんでお礼を言って受け取り、村へ持ち帰り、中を見ると、米、ひえ、大豆、小豆、麦、栗、きびの七つの種が出てきました。そのふくろからは尽きる事なく種が出て来て人々はみんなで分けました。

農民たちはそれから奈具佐の地を七つの種の村。七種村と呼んだそうです。その時種を持ち帰り助かった八千軍野の人々は助けてもらった恩を強く思っていたので後にこの種の字を使って軍を種に変え、八千種村と変えたそうです。

奈具佐山→七種村
八千軍野→八千種村



・大昔からの福崎町の歴史

天日槍の軍隊が八千人いた八千軍野。伊和大神の子、建石敷命が神前山におりたった高岡里。八千種と高岡、山崎、七種の地名は播磨国風土記に由来がのっているすごく古い歴史のある地名でした。川辺野（田原方面）も誉田天皇と応神天皇が狩りに六回も来ています。研ぎ石等が山から出てきて、道具を直すのにも便利だったようです。

◆わたしの名前の人物

多駝里の阿我乃古（あがのこ）は、応神天皇のお供で福崎町東部地区に来ていましたが、「この土地を私にください」と天皇に言ってここにとどまり、この多駝を最初に作り上げた人物です。日本書紀では『阿良津神』として出てきますが、これは『阿我乃古』と同一人物です。

姫路市白国にある佐伯神社にまつられています。

◆感想

わたしはこの福崎町に関する物を調べて、大昔の事が今も形を残して語り継がれているのは、みんながこの福崎町が大好きでそして大切にする心があるからだと思いました。そしてたくさんの想いがあるからこそ形になって神社や物語として残っているんだろうなと思います。わたしのお父さんもこれからの時代を大切に作り上げていってほしいという願いを込めて「のこ」と名付けてくれました。わたしも自分の願いも一緒に乗せて、がんばっていこうと思いました。

第七回福崎町柳田國男ふるさと賞 小学生低中学年の部 受賞

ひいおばあちゃんが子どものころの家

田原小学校四年 長澤 茉里奏

私の家には百一歳になるひいおばあちゃんがいます。昔はどんな生活をしていたのか興味があったので、ひいおばあちゃんに、子どものころに住んでいた家は、どんな家だったのかを聞きました。

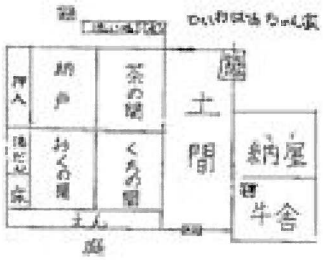
昔の家の屋根は、今のようなかわらではなく、かやぶきで、一階建ての平屋でした。戸口（玄関）を開けると、広い土間が裏口まで続いていました。土間は、土のままの部分です。土間の右側には牛舎（牛小屋）がありました。牛は牛舎から首を出して、土間に置いていた「かいおけ」のエサを食べていました。昔は、畑や田んぼを耕すのに牛を使っていたので、牛は、とても大切にされ、一つの財産でもあったそうです。

牛舎の横の納屋では、雨の日や冬の間は、わらを使って縄を編んだり、「むしろばた」という織り機を使って、むしろを織ったりしていました。また、織ったむしろを、「かます」という、じょうぶな袋にしてくれるところが、井ノ口と馬田にあったそうです。

土間の奥の方には、「おくどさん」といって、かまどが三つ並んでいました。一つのかまどには、いつもお茶をわかす茶がまがあり、残りの二つのかまどで、ごはんとおかずを作っていました。土間の奥の左側には、調理をする台や洗い場、井戸の水をくんでためておく水がめがありました。

出口から外へ出ると、少し離れたところに井戸があり、井戸の水をくんで顔を洗ったり、食事に使ったり、洗濯などもしていました。お風呂も土間のところにありました。お風呂の水も井戸の水を使うので、何度もくみあげてお風呂まで運んでいたそうです。

ひいおばあちゃんは、「かまどやお風呂の火をたきつけるのに、木の枝やこく葉を使っとったんや。そやから、子どものときは、かごを背中に背負って近くの山へ行って、こく葉拾いをしとったんや。お風呂もわかしすぎると熱くなりすぎるから、熱い！といわれたら、あわてて井戸から水をくんできて、お湯の調整をしていたんやで。」と笑いながら教えてくれました。



土間の左側は住まいになっていました。床を張った部分です。そこには、田の字のように四つの部屋がありました。

仏壇と床がある「奥の間」、入り口に近い「口の間」。この二つの部屋からは庭が見え、お客さんが来られた時や村の集まり、結婚式やお葬式など、特別な時に使われる部屋でした。口の間の隣の「茶の間」は、家族が食事をとったり、くつろいだりするときに使う部屋です。一番奥にある「納戸」は、寝るときに使う部屋で、夜になるとふとんをしいて、家族みんなで寝ていました。赤ちゃんも、病院ではなく、この部屋で産んでいたそうです。

電気は、十六ワットの電灯が家にたった一つだけだったので、うす暗い中で生活をしていました。ひいおばあちゃんの家は電灯があったけど、山の中の地区では電気がまだなくて、「ことぼし」というランタンのようなものを使って明かりにしていたそうです。

ひいおばあちゃんは、「戦争が終わってから、いろいろなものがどんどん変わっていったんよ。農業も機械化されて手を使わなくなっていったし。」と言いました。今は、機械があって、ボタン一つでご飯を炊いたり、水の温度を調節したり、いろんなことができるようになったので、とても便利になりました。

昔の家や生活の様子は、今と違うことばかりで、生活するのも大変だっただろうなと思い、ひいおばあちゃんに、「昔の生活は不便だった？」と尋ねてみました。すると、「その生活が当たり前のことだったから、大変だとは思わなかったよ。」と笑いながら答えてくれました。

大正生まれのひいおばあちゃん。学校のこと、遊びのことなど、もっともっといろんなことを聞いてみたいと思いました。

第七回福崎町柳田國男ふるさと賞　中学生の部　受賞

昔から残る桜の獅子舞

福崎西中学校一年　岡本　琉那

◆はじめに

私の住む桜地区で一時期途絶えていた獅子舞が復活しました。その獅子舞が復活するに際して、自分も獅子舞に出演させていただくことがありました。その中で獅子舞に興味を持ち、獅子舞はどのようなものだったのか獅子舞のルーツなどを詳しく知りたいと思い調べることにしました。

◆獅子舞について

「獅子舞」とは、日本各地に伝わる伝統芸能の一つで祭囃子に合わせて獅子が舞うもののことです。現在は地方によって様々ですが、主に正月などの縁起の良い日に行われます。厄病退治や悪魔払いをするものが一般的だといいます。

獅子舞の起源は、中国ともインドとも言われています。どちらの説が正しいのかは定かではないそうですが中国の獅子舞が最古とされる記録が「漢書」にあるそうです。

日本では16世紀初めに伊勢（三重県）地方でききん、疫病を追い払うために獅子舞をつくり、正月に獅子舞を舞わせたのが始まりといわれています。その後、17世紀に伊勢地方から江戸に伝わり疫病退治や悪魔払い、世を祝う縁起ものとして行われるようになりました。急速に日本各地に広まったのは「江戸大神楽師」、「伊勢大神楽師」と呼ばれる団体が獅子舞を踊りながら各地で悪魔払いをしたことがきっかけと言われています。ちなみに獅子舞には伎楽（神楽）系と風流系があり、桜区の獅子舞は伊勢大神楽系統の神楽獅子だそうです。

◆桜区の獅子舞

1、文化財桜獅子舞

桜区に伝わる獅子舞は、昭和53年に町から指定された民俗文化財です。昭和53年以前も奉納が途絶えることもあったそうですが、衰退と復活を繰り返したのち、平成20年に再度復活したことで、現在に至っています。

2、昭和53年以前の桜獅子舞

桜区の獅子舞がはじまったのは、約90年前、昭和7年（1932年）だそうです。桜獅子舞保存会の会長さんによると薬師堂を新築するときに姫路市山田町の方に獅子舞を教わり、村の若い人たちで始めたのが、桜獅子舞の起源だそうです。初めて桜の獅子舞をやったというのが保存会会長さんのお父さん方の世代だったと聞き、とてもびっくりしました。それから約10年間、獅子舞は続けられましたが、後継不足のため途絶えてしまいました。

3、昭和53年頃の獅子舞

その後、昭和32年頃に再び桜の獅子舞は村の人たちによって復活しました。そのとき獅子舞は舞子が10人程度、はやし子も10人程度でやや少ない人数でした。はやす笛も3～4人で他の地域よりもかなり少ない人数だったようですが、ほぼ毎日あったという練習のおかげで多くの演目をこなせたそうです。

しかし、再び復活した桜獅子舞ですが継承者の高齢化や後継者育成の困難さから、再び途絶えてしまいます。そして最後の桜の獅子舞として昭和55年（1980年）に奉納されました。最後の奉納となったのは昭和55年の秋祭りに神谷大歳神社参詣が行われた時でした。「もう見られなくなるのか。」と惜しまれながら桜獅子舞は幕をとじたそうです。

4、再度復活！桜獅子舞

幕をとじた桜獅子舞ですが、その後30年後の平成20年に再び復活します。平成13年頃から「復活させては」との声が上がり、寄合などで話し合った結果、桜区の消防団の方々が中心となって練習をはじめました。平成17年からは一部だけでしたが、秋祭りの際、桜大歳神社にて奉納を行いました。現在でも消防団の方々が中心となり、はやし子は子ども会の中から数人でやっています。私もはやし子として獅子舞と一緒に舞ったことがあります。練習も楽しく本番では緊張するけれど、とても達成感があり楽しいです。

5、これからの桜獅子舞

これまでに書いたように、色々ないきさつがあり、何度も途絶えてし

まいながらも桜獅子舞は地元の人々に愛され続けてきました。しかし、課題もあります。これからの桜獅子舞について、桜獅子舞保存会会長さんと桜区消防団の方にお話をうかがいました。

（桜獅子舞保存会会長　大杉さん）

村の若い人達が立ち上がり、復活させてくれたのはうれしかった。しかし、せっかく復活させたけど今まで同様、長く続かないのではという心配もある。伝統を受けついでいくのは大変だと思うが、消防団だけでやらせるのではなく他の人達も協力して無理せん程度に頑張ってほしい。

（桜区消防団　岡本さん）

「消防団を中心にやろう！」と頑張ってここまでこれたのは、いいことだと思う。練習ももちろん大変ではあるが会長をふくめ、昔、桜獅子舞をやった人から学んで楽しくさせてもらっている。まだ完成度の低い演目もあるが僕たちの後を継いでいってくれる人を育てていくことも考えつつ、いつか二之宮でも奉納できるようになればと思う。

とコメントをいただきました。私もせっかく復活させたのだから長く続いてほしいと思うけど、今の状態では消防団の方への負担が大きすぎると思います。私達が積極的に協力して一緒に引き継ぐことができるといいなと思います。

◆おわりに

今回、桜区に伝わる獅子舞について資料を集めたりインタビューをしたりして調べてきましたが、自分の住む地区に歴史ある伝統芸能があるということはすばらしいことだなと改めて思いました。今は、消防団の方々が中心にやっておられるけど、もっと桜区全体が協力すれば長く続かせていけるのではないかと思います。また調べるにあたって図書館などには、ほとんど資料がないことにおどろきましたが、地域の方にご協力いただき、詳しいことまで教えていただきました。ありがとうございました。

桜獅子舞のもっと詳しい歴史や、獅子舞を通しての他地区との交流について、そして姫路市山田町の獅子舞や市川町甘地の獅子舞の歴史についても、詳しく調べてみたいです。

第三十八回 福崎町美術展作品募集

第三十八回福崎町美術展（公募展）の作品を募集します。

皆様方のご応募を心よりお待ちしています。

会期　令和二年五月二十二日（金）～五月二十四日（日）

会場　福崎町エルデホール

主催　福崎町・福崎町教育委員会

部門　日本画・洋画・書・写真・彫塑工芸

応募は一部門一人一点、未発表の作品に限る。

作品搬入　令和二年五月十六日（土）午前九時～午後四時

作品　未発表のもの・一人二首以内

応募料　一首につき五百円

要領　原稿用紙に楷書で縦書き

宛先　福崎町文化センター内　文化協会事務局　宛

締切　令和二年六月三十日（火）

山桃忌奉賛 第三十五回短歌祭作品募集

柳田國男先生と井上通泰先生の命日にちなみ、両先生を偲ぶ会として、毎年八月に山桃忌が行われています。

本年の短歌祭は、左記の要領で作品を募集します。

日時　令和二年八月八日（土）

場所　福崎町文化センター

主催　福崎町文化協会・福崎短歌会

＊表紙の写真＊

表紙の絵は、松岡映丘作「浦の島子」の画稿で、福崎町立柳田國男・松岡家記念館に所蔵されています。浦の島子とは、昔話でよく知られた主人公、浦島太郎のことです。浦島太郎と呼ばれるのは室町時代、御伽草子に登場してからで、それ以前は浦の島子と呼ばれていました。

この絵は、松岡映丘が明治三十七年（一九〇四）に東京美術学校日本画科を首席で卒業した際の、卒業制作です。

編集後記

たくさんの方々のご協力により、福崎町文化第三十六号を発刊することができました。

玉稿をお願いしました皆様方には大変お忙しい中執筆いただき、ご協力くださいましたこと厚く御礼申し上げます。

ありがとうございました。